

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26360024

研究課題名(和文)日本人のモンゴル抑留に関する総合的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study on the Internment of Japanese in Mongolia

研究代表者

ボルジギン 呼斯勒(Borjigin, Husel)

昭和女子大学・人間文化学部・教授

研究者番号：40600193

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、モンゴル、ロシア、台湾、中国の諸文書館での精査によって、歴史の事実を裏付ける複数の極秘資料を発見したほか、当時のことを知るモンゴル外務省や軍の関係者、収容所の管理者等の当事者から証言を得ることができた。2回国際シンポジウムをおこない、関係諸国の研究者と意見を交換し、新たな知見を得ることができた。2冊の論文集を世に問い、日本人抑留者がモンゴルに送られた背景、過酷な労働の実態、引き揚げ、および遺骨収集における両国の交流事業の促進、1972年の外交関係樹立へのつながりなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Significant numbers of classified documents which can demonstrate pertinent historical facts regarding Mongolia - Japan relations were found and collected through the investigation of various archives of Mongolia, Russia, Taiwan, and China. In addition, the testimonies of parties who had worked in the Ministry of Foreign Affairs of Mongolia, the Mongolian Army, and the Prisoner Management Department were obtained. We have hosted two international academic conferences to exchange our ideas with relevant scholars. Based on these meetings we have put forward some new ideas, publishing two proceedings detailing the background, working conditions, and repatriation process of Japanese prisoners who had been exiled to Mongolia. It is pointed out that bilateral exchange activities such as the collection of remains played a significant role in diplomatic relations between Mongolia and Japan in 1972.

研究分野：地域研究

キーワード：抑留 館 モンゴル 捕虜 東アジア国際関係 モンゴル公文書館 満洲国 国際情報交換 ロシア公文書館

1. 研究開始当初の背景

「シベリア抑留」とよばれるように、第二次世界大戦後の日本人の海外抑留について、人びとの視線は主にシベリアないし北朝鮮、近年では旧ソ連領のカザフスタンなど中央アジア諸国とバルト3国に抑留された日本人にむけられている。しかし、実際には、当時モンゴルにも多くの日本人が抑留された。

モンゴル抑留について、日本では、抑留者あるいはその親族などにより書かれた体験記やドキュメンタリーなどが多く刊行されているが、学術的な論述は決して多くはない。1995年6月に東京でおこなわれた国際シンポジウム「日本・モンゴル——過去から未来へ」と展示会「ドキュメント——日本人のモンゴル抑留」のために、参考資料として、『ドキュメント——日本人のモンゴル抑留：モンゴル歴史中央文書館所蔵資料による』（朝日新聞社、1995年）が作成された。しかし、同シンポジウムは日本人のモンゴル抑留にふれたものの、主な議論はモンゴルの対日参戦やモンゴルの現代史と日本のかかわりに集中していた。また、同資料集はモンゴル国立歴史中央文書館の所蔵する資料の一部を収録しているのみで、ほかの資料、とりわけモンゴル人民党中央文書館やモンゴル諜報局中央文書館、国防中央文書館、外務省中央文書館などの文書館の資料を収録しておらず、その所蔵の状況なども不明のままであった。

他方、民主化以降、モンゴル国では、モンゴル国家建設における日本人抑留者の貢献をたたえ、ダムバダルジャー寺のモンゴル抑留日本人死亡者慰霊堂などについての研究はあるが、民間人を含む日本人抑留者を「日本人捕虜」として位置づけ、彼らの強制労働は日モ友好の基礎にもなったと強調されている（Ch. ダシダワー『モンゴルにいた日本人捕虜』[モンゴル語]、ウランバートル、2013年など）。収容所群の組織や抑留者の帰還をめぐる国際関係、日本人捕虜利用をめぐるモンゴル・ソ連の交渉、および帰還をめぐる日本・モンゴルの交渉などについては、まったく検討されておらず、研究課題として残されていた。

2. 研究の目的

本研究は、文献調査とオーラルヒストリー調査から得られる基礎的なデータにもとづいて、第二次世界大戦終結後に際して、モンゴルに抑留された日本人に焦点をあて、抑留にいたるまでのプロセスや収容所群の組織、抑留者の生活・労働の実態、帰還をめぐる国際関係と政治過程などを総合的に分析し、その全体像を明らかにし、歴史の恩怨を乗り越えた日本とモンゴルの友好関係の経験から得られる知見とその検討を目的とした。また、日本の手先とされ、日本人とともにモンゴルに抑留された内モンゴル人の状況も視野にいった。さらに、抑留者にとって、「モンゴル抑留」はどのような意味をもつのか、モン

ゴルの国民はどのように日本人の抑留をみているのかについても検討することにした。

3. 研究の方法

本課題に掲げた目的を実行するにあたって、研究代表者は日本を拠点として、日本、モンゴル、ロシアの専門家の協力を得て、モンゴルおよびロシア、中国、台湾の諸文書館に所蔵されるさまざまな史料を精査・収集し、系統的かつ綿密に分析した。また、存命中の抑留者や収容所の管理者など、当時のことを知る最後の世代（そのほとんどは90歳以上の高齢である）の証言を重視し、聞き取り調査も実施した。資料状況に詳しいモンゴル、ロシアの研究協力者との共同作業により、研究代表者と研究連携者は日本人のモンゴル抑留をマクロな枠組みで把握する確かな根拠を獲得できた。

さらに現地と東京ではシンポジウムを組織し、日本、モンゴル、ロシアにおける抑留研究の専門家を招き、活発な議論をおこない、研究成果を世界に発信した。

4. 研究成果

(1) 研究代表者は、モンゴル、ロシア、台湾、中国の諸文書館での精査によって、「1945年の戦争で捕虜となった日本側の兵士、将校、及び死亡者とかかわる資料」（モンゴル語、1945年）や、ドキュメンタリーフィルム『ウランバートル市建設における日本人抑留者（1945～47年）』など歴史の事実を裏付ける複数の極秘資料を発見したほか、当時のことを知るモンゴル外務省の関係者や日本人抑留者を中国からソ連経由でモンゴルに移送する業務にたずさわったモンゴル人民革命軍の将校、収容所の管理者などの当事者から証言を得ることができた。

(2) 研究代表者は第3回日本・モンゴル青年フォーラム（ウランバートル、2014年8月）と第2回アジア未来会議（バリ島、2014年8月）、第3回アジア未来会議（北九州市、2016年10月）で研究成果を報告したほか、日本、モンゴル、ロシアの研究者を招集し、2015年8月にウランバートルで、2016年5月に東京で国際シンポジウムをひらき、意見を交換し、研究報告をおこない、2冊の論文集を公刊した。これらによって、新たな知見が得られ、抑留研究における空白の一部が埋められた。

(3) 日本人抑留者がモンゴルに送られた背景や生活・労働の実態、嘆願活動などをあらたに検討し、モンゴルにおける抑留者の死亡率がより高くなったことは以下の原因によるものと指摘した。①第二次世界大戦終結直後、敗戦国の日本人は、完全に否定された社会環境のなかにおかれ、住環境や医療状況はきびしかったこと。②モンゴルに抑留される対象としてえられた日本人は、収容した地域から移動する最初の段階からすでに赤痢などの病気にかかったものがあり、それが次第に悪化し、少なからぬ人が移送途中で病

気あるいは栄養失調症で病死したこと。③ 1945 年後半と 1946 年前半の段階で、モンゴル国内には 1 万 2 千人規模の日本人抑留者をうけ入れる体制がととのっていなかったこと。

(4) モンゴルに抑留された日本人の総数は、モンゴル人民革命軍がソ連軍からうけられた日本人の数より目減りしていること、その理由は、移送途中で病死したものや逃亡したもの、ソ連領内および旧満洲国領内のソ連軍病院にのこされたもの、自殺者などが多くいたことが判明した。これに対し、日本の一部の抑留者が主張した数字はモンゴルのデータよりやや多くなっているが、それは主に抑留者自身が所属部隊の規模にもとづいてだした数字であり、病死者の数もある程度把握されていたものの、そのほかの原因でモンゴルまでたどりつけなかったものに対する情報が十分伝達されなかったことも分かった。

(5) 日本人の海外抑留は、異なる国、地域、民族にとって、異なる意味をもつ出来事になったが、日本人の 2 年間にわたるモンゴル抑留は、のちの両国の政府の交渉のきっかけとなり、とりわけ、1966 年以降の遺骨収集事業は、日本・モンゴルにおける政府、民間交流の事業を促進し、それが 1972 年の外交関係樹立へとつながったことは、今回の研究によって、より明らかになった。

(6) 本研究は、また、引揚をめぐる日本・モンゴル・ソ連・アメリカなど関係諸国間の交渉のプロセスを考察し、モンゴルにおける長期抑留者の送還(1954~55 年)は、中国経由でおこなわれたが、中国はその抑留者の帰還を、国交締結を含む対日外交交渉の一枚のカードとして利用していたこと、当時、日本と同盟関係をもつ台湾は中国とモンゴルを独立国家としてみとめないことを念頭に、これらの国の抑留者の日本帰還をめぐる交渉に対して、干渉、妨害をつづけたことなどを解きあかした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① ボルジギン・フスレ、1945 年の日本人のモンゴルへの移送、学苑、査読有、第 910 号、2016、37-53
- ② ボルジギン・フスレ、日本人抑留者の帰還をめぐる国際関係についての一考察、学苑、査読有、第 895 号、2015、38-52
- ③ ボルジギン・フスレ、日本人のモンゴル抑留についての基礎的研究、学苑、査読有、第 886 号、2014、1-20

[学会発表] (計 10 件)

- ① ボルジギン・フスレ、溥儀のシベリア抑留、第 3 回アジア未来会議、北九州市立

大学 (福岡県北九州市)、2016 年 10 月 1 日

- ② ボルジギン・フスレ、1945 年の日本人のモンゴルへの移送、国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」、昭和女子大学 (東京都世田谷区)、2016 年 5 月 28 日
- ③ 田中克彦、日本人のモンゴル抑留の国際法上の根拠について、国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」、昭和女子大学 (東京都世田谷区)、2016 年 5 月 28 日
- ④ 二木博史、戦争、動員、戦後国家建設——日本人のモンゴル抑留の背景、国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」、昭和女子大学 (東京都世田谷区)、2016 年 5 月 28 日
- ⑤ 富田武、モンゴルにおける日本人捕虜——比較、国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」、昭和女子大学 (東京都世田谷区)、2016 年 5 月 28 日
- ⑥ エレーナ・カタソーノワ、スターリンはなぜポツダム宣言第 9 項を破ったのか、国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」、昭和女子大学 (東京都世田谷区)、2016 年 5 月 28 日
- ⑦ G. ミャグマルサンボー、モンゴル・日本両国の関係とモンゴルに残された日本軍将兵の遺骨について、国際シンポジウム「日本人のモンゴル抑留とその背景」、昭和女子大学 (東京都世田谷区)、2016 年 5 月 28 日
- ⑧ Husel Borjigin, Returning Japanese Captives and the International Relationship at that time, The 8th International Symposium in Ulaanbaatar “The Japan-Mongolia Relationship: Its History, Present, and Prospects in the 21st Century Reorganization of the New Order in East Asia”, Ulaanbaatar, Mongolia, 29 August, 2015
- ⑨ ボルジギン・フスレ、日本人のモンゴル抑留について——日本語・モンゴル文献を中心に、第 2 回アジア未来会議、バリ島 (インドネシア)、2014 年 8 月 22-24 日
- ⑩ ボルジギン・フスレ、A Study of the Japanese Internees in Mongolia: Mainly Japanese Documents, 第 3 回日本・モンゴル青年フォーラム「日本とモンゴル——過去から未来へ——」、ウランバートル (モンゴル国)、2014 年 8 月 5 日

[図書] (計 2 件)

- ① ボルジギン・フスレ編著、日本人のモンゴル抑留とその背景、三元社、2017、174
- ② ボルジギン・フスレ編著、日モ関係の歴史、現状と展望——21 世紀東アジア新秩序の構築にむけて、昭和女子大学、2016、

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ボルジギン・フスレ (HUSEL, BORJIGIN)
昭和女子大学・人間文化学部・国際学科・
教授
研究者番号：40600193

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

田中 克彦 (TANAKA, Katsuhiko)
一橋大学名誉教授
研究者番号：10014432

(4) 研究協力者

二木 博史 (FUTAKI, Hiroshi)
東京外国語大学名誉教授

富田 武 (TOMITA, TAKESHI)
成蹊大学名誉教授

エレナ・カタソノワ (Katasonova,
Elena)

ロシア科学アカデミー東洋学研究所主任
研究員

G. ミヤグマルサンブー (G. Myagmarsambuu)
モンゴル科学アカデミー歴史・考古学研究